

奥

出雲でお世話になった某氏は、このところ言語研究に余念がない。事の発端は、奥出雲の言葉を集めて記録してほしいという依頼があったからだが、フィールドワークを重ねているうちにのめりこんでいった。というのは、氏の住まう地域だけでも場所所によって違うことがどんどん明らかになっていったからである。その成果を知った関西の複数の大学が興味を示し、今や共同研究に発展しそうな勢いである。

ぼくも奥出雲に長く暮らしたから、彼の地の言葉には物理的に大量に接してきた。その地名が端的に示すごとく出雲地方の一角であり、文化圏としても一体と言つてよい。だから奥出雲の言葉は出雲弁である。しかし、松江や出雲の言葉とはかなり違うことも事実だ。それはぼく自身、奥出雲に暮らし始めてすぐにはわかった。しかし、奥出雲、しかも字の中でもさらに細分化できることを氏は発見したのである。

これには、うなずくところがある。氏の発見を敷衍すれば、出雲弁とひとくくりにするも、松江、出雲、奥出雲で異なるし、さらにその中の地域ごとにそれぞれで異なっていることになる。松江なら共通の出雲弁、とは限らないのだ。事実、そう思わざるを得ない微妙な言い回しや語彙のちがいを感ずることがままあ

る。厳密に言えば、家単位にまで細分化できるかも知れない。

氏が夢中になった心持がちよっぴりわかる気がする。見つけた言葉の一つ一つが愛おしくなったのだろう。何もしなければ絶えていくほかないと思えばよい。若い研究者たちが遠くから馳せ参じてくるのは心丈夫に違いない。しかし、彼女らには言葉の向こうに重なる父母や家族の記憶はない。自分がするほかないのだ、と氏なら思っていることだろう。

氏の思いへの想像が止まないのは、ぼくもまた同じようなことをずっと考えているからだ。このところ出雲弁で文章を書くことが続いた。書きながら、使っていない言葉がすらすらと出てくることに我ながら驚いた。まるで言葉の方が出たがっているみたいだった。これは、ぼくの言葉ではない。父母の言葉だ。傷みもせずにそのまましまわれていた。出雲弁だけれど、出雲ではなく奥出雲でもなく松江のごく限定された地域の言葉。

出雲弁で書くことになったとき、広く出雲弁を俯瞰して見る必要があるかなと初め思った。できるだけ共通している部分を抽出して。でもそれは共通語を選択することと同じだ。今は、ぼくの父母、祖父母が語っているふうに書いた方がいいだろうと考えている。

木幡智恵美

4

老い老いに

私が二号から連載したのは、「お婆の話」だ。伯母は三歳の時に髄膜炎を患い、命はとりとめたものの、半身に麻痺が残り、知的発達が遅れた。障がい児教育に携わるようになったのは、当時担任していた児童のことが直接の要因だ。けれども、それまでも気になる子たちのことをずっと引きずってきており、その根っこには伯母の存在があった。出雲に帰った中学一年から高校を卒業するまで共に過ごした伯母との日々は、物の見方や考え方に大きな影響をもたらした。まずはそれを書きたかったのだろう。その後、「お婆さん学生見聞録」も書いていたから、当時歩み始めた障がい児教育に結構な熱を入れていたようだ。

その中間に連載したのが「腐ったかぼちゃ」。これは通信を始めようとの話があつてすぐに夫が解離性大動脈瘤で入院した時の顛末を書いたものだ。普段通り出勤した夫が病院に運ばれたとの知らせを受け、急いで病院に向かう。診察室に入ると、付き添ってくれた二人の教諭と話している夫を見て一安心。痛むという背中を摩りながら話を聞く。「胃かな、肩かな」などと言っていたが、CTの結果説明で重篤な状態にあることを思い知らされた。心臓から全身に向けて出る大動脈の内壁が裂け、流れ出た血液が輪切りの画像では三日月形に見える。腹部に近いところまで三日月が写っていた。運ばれた病院には心臓外科の専門医がいなかったこと、その日はCCUに入れられ翌日赤に運ばれることになった。

久々に「腐ったかぼちゃ」を読み返すと、その夜のことがまざまざと浮かび上がる。担当医に、いつ何が起こるか分からないので院内で待機するよう言われたのだ。一旦家に帰り、入院に必要なものを揃えながら、義母にどう伝えるか考える。義母が我が子(義弟)を亡くしてまだ二年経っていない。胸の痛みで入院すること、一晩付き添うことを伝え、子どもたちには義母の言うことを聞くよう言い聞かせ病院に引き返した。寝具を備えた部屋で過ごす、眠れるものではない。家を建て換えたばかりだ。もし夫に何かあつたら、一人で家のローンを払い、子どもたちを育て、老齢の義母の面倒をみるなんてできるだろうか。規則正しい時計の針の音が頭の底に響き続けている中、答えの出ない問いを繰り返していた。

30代フリーター 自民党総裁選の候補者らは例外なく「憲法改正」を掲げる。「次の総理に最も重点的に取り組んで欲しい政策」をひとつだけ尋ねた8月のJNNの世論調査では「憲法改正」は1・9%しかないのに。
年金生活者 憲法改正は総裁選の公約の中でもとりわけ党内向けの性格を帯びている。と同時に、それはアメリカ向けの公約でもある。

アメリカは自国だけでは負いきれなくなった世界の安全保障の負担を同盟国に肩代わりさせたがつており、日本にそれをさせるには9条の壁を取り払わなければならないと考えている。総理大臣になるにはアメリカの後ろ盾が必要と思っている総裁選の候補者たちがそろって改憲を強調するのはワシントンへの忠誠の宣言でもある。

30代 左派、リベラル派は、憲法への自衛隊明記や緊急事態条項の新設を目指す自民党の狙いを「日本を戦争のできる国にすること」にあるとして批判している。

自らは血を流さずに、中国を少しでも弱らせることに有事を利用しようとするだろう。

30代 その見方を拡張すると、アメリカは台湾の独立派をそのかすなどの工作をして、政権を独立志向に傾斜させ、その気のなかつた中国を武力侵攻に踏み切らざるを得ない状態に追い込む戦略を選択肢のひとつとして描いている可能性がある。

年金 仮にそうだととしても、今の台湾はその方向を向いていない。他の主権国家並みに「独立」を宣言し、ナショナリズムを謳歌すれば、中国から兵を差し向けられ、踏みつぶされかねない。だからといって、中国に飲み込まれて自由と民主主義を失うわけにはいかない。そこで選んだのが、大つぴらに「独立」を言う代わりに、自国を国家として認めてくれない国々とも友好関係を結んで自らを支える力とし、中国に対して「自立」する道だ。

30代 世界に例のない外交のやり方だ。

年金 中国の軍拡などで安全保障環境が厳しくなつたので、抑止力を高めなければならず、そのためには憲法改正が必須だというのが自民党の主張だ。抑止力とは「戦争ができる力」のことなので、その点では左派、リベラル派の言う通りだろう。

だが、「戦争ができる国にする」とことと「戦争をする国にする」ことは同じではない。日本を「戦争をする国」にし、国民に流血を強いる覚悟が、「裏金」であたふたする自民党にあるとは思えない。

30代 アメリカが日本に憲法を変えさせたがつているのは、いざとなつたら日本を「戦争をする国」にするためだろう。

年金 憲法9条に自衛隊の存在を明記すれば、いま限られた場合にしか認められていない集団的自衛権の行使の範囲を大幅に広げる道が開かれる。自衛隊の海外派兵に対する制約が大きく緩和される。世界の覇権をめぐつて中国と経済戦争の形をとつた無血の戦争を

年金 蔡英文政権でデジタル担当大臣としてコロナ対策などにあたつたオードリー・タン（唐鳳）は「現在の台湾の政治が先進的だといえる理由が二つあります」と自著で語っている（『オードリー・タン デジタルとAIの未来を語る』）。ひとつはインターネットの普及で人びとが民主主義を「一つのテクノロジー」と考えるようになり、「テクノロジーはアップグ

続けるアメリカにとつて、それは強力な抑止力を手にすることを意味する。

30代 中国が台湾の武力統一に踏み切つた場合、「アメリカ軍の戦力の使用を排除しない」とバイデンは表明している。もしその通り作戦を実行すれば、日本の自衛隊の行動を求めなければならぬと判断する局面が出てくるかもしれない。

年金 ウクライナ戦争ではつきりしたように、アメリカが最優先にしていることのひとつは核戦争の回避だ。そのため、ロシアとじかに軍事的な衝突するのを避け、ウクライナへの支援は武器の援助と経済制裁にとどめている。それによつてウクライナの犠牲が広がり、国家が破綻しても、アメリカにとつては、ロシアを弱らせるという利得が見込まれる。

このことは台湾の場合にも言えるだろう。中国が侵攻しても、アメリカは経済制裁と武器援助しかせず、「アメリカ軍の戦力の使用」は実行しない可能性が高い。台湾をウクライナ化し、

リードされなければならない」という考えが根づいたことだ。台湾の憲法が状況の変化に応じて何度も改正されたことがそれを証明している、とタンは言う。私の関心に引き寄せた言い方をするなら、民衆の意志が「憲法制定権力」として繰り返し表出されたということになる。

もうひとつの先進性は「憲法に『政治への直接参加の精神』が謳われていること」だ。「台湾の憲法はスイスを参考にしてあるため、決して純粋な共和代議制ではありません。そのため、いわゆるリコール権などが含まれている三民主義（民族主義・民権主義・民生主義）も、憲法が起草された当時、すでにかなり進んでいました」

民主主義の絶えざる「アップグレード」も、「政治への直接参加」もひと言で言うなら、国民に対して「国家を開く」ことにほかならない。それを国家目標のひとつにしている点で、台湾は世界の先進諸国よりも一歩前を進んでいる。

ニュース日記 938
中村 礼治

日本の改憲、台湾の改憲